

NICU 入院母体搬送例の検討

小川 雄之亮 小山 典久

要約：1989年1年間にNICUに入院した母体搬送例について検討した。総入院数148例中院内出生例は70例（48.6%）で、このうち37例（53%）が母体搬送例であった。これら37例の内搬送後24時間以内に出生となったものは超未熟児3例を含む9例で、いずれの例も救命出来た。一方、母体搬送後24時間以上を経てから出生した28例の内4例（14.3%）が死亡した。これら4例は23週0日、516gの超未熟児、24週2日、622gのヘルペス感染の超未熟児、38週5日、2,960gのOTC完全欠損症、38週1日、1,984gの多発奇形を伴う18トリソミーであり、今回の調査においては、児の予後は母体搬送後出生までの時間よりも、児の合併疾患の有無に大きく左右されることが示されたと共に、母体搬送後短時間で分娩に至らざるを得ない例に対するケアの向上が示唆された。

見出し語：母体搬送，超未熟児，合併疾患

研究方法

母体搬送システムの確立の基礎資料に資する目的で、1989年1月1日より同年12月31日までの1年間に埼玉医科大学総合医療センター小児科NICUに入院した例について、母体搬送例を中心に母体搬送時胎齢、出生時在胎、搬送後出生までの期間、出生時体重、児の合併疾患、および短期予後について調査検討した。

結果

本調査の背景データとなる埼玉医科大学総合医療センター小児科NICUの1989年1年間の出生体重別、院内・院外出生別の入院数および新生児死亡数を表1に挙げた。

総入院数148例中院内出生児は70例（48.6%）であった。このうち2,500g未満の低出生体重

児は53例（75.7%）であった。1,000g未満の超未熟児は9例で低出生体重児の17%を占め、しかも24週未満が1例、500g未満が1例含まれていた。

院外出生児と比較すると、2,500g未満ではどの体重群をとっても院内出生児が多く、母体搬送例の多いことを裏付ける成績であった。また、死亡例は院内出生ではわずか4例（24週以降では3例）で、いずれも母体搬送例であったが、内2例は18トリソミーとOTC完全欠損症の先天異常で、救命不能例であった。

院内出生例のうちの母体搬送例をみたのが表2で、全体としては70例中37例（53%）であったが、出生体重が少ないほど高率となり、1,000g未満群と1,000～1,499g群では78%を占めた。

母体搬送37例の搬送時胎齢は16週から41週、搬送時から出生までの期間も24時間以内から150

表 1 体重別入院例数
(1989. 1. 1.~1989. 12. 31)

出生時体重(g)	院内出生例数	院外出生例数
~ 999	9(2)	5(1)
1000~1499	9	3
1500~1999	22(1)	14(2)
2000~2499	13	11(2)
2500~	17(1)	45(2)
計	70(4)	78(7)

()内は死亡例 埼玉医科大学総合医療センター
小児科 NICU

表 2 院内出生 NICU 入院例中の母体搬送例
(1989. 1. 1.~1989. 12. 31)

出生時体重(g)	母体搬送/院内出生	%
~ 999	7/9	78
1000~1499	7/9	78
1500~1999	13/22	59
2000~2499	6/13	46
2500~	4/17	24
計	37/70	53

埼玉医科大学総合医療センター小児科 NICU

日まで分布した。母体搬送後24時間以内に出生した例は25週3日~35週1日, 476g~1,886gの9例で, いずれの例も救命し得た。死亡例4例の内訳は, 21週4日に母体搬送され10日後の23週0日に出生した516gの超未熟児, 24週1日に母体搬送され翌日の24週2日に出生した622gのヘルペス感染の超未熟児, 29週6日に母体搬送され38週5日に出生した2,960gのOTC完全欠損症, 35週2日に母体搬送され38週1日に出生した多発奇形を伴う1,984gの18トリソミーの各1例であった。

考 案

ハイリスク新生児の医療システムにおいて, 出生前から予測される例では周産期産科と新生児小児科の揃った施設への母体搬送のシステムの確立が重要である。この母体搬送に関してはシステム化の前に諸種の基礎的なデータの集積

が必要である。

本研究では人口約100万~200万をカバーする地域において母体搬送が可能な唯一の施設での成績を示した。本研究で示されたごとく, 母体搬送例のNICU入院頻度は53%と高く, 母体搬送の受け入れにはNICUでの病床の確保が必要不可欠である。NICUへの入院例は院内出生児が多く, 従来統計と比較しても年々増加しつつある事実は母体搬送例が益々増えつつあることを物語っているが, われわれの施設はNICUの病床がわずか9床しかないため, 母体搬送例の産科への入院の可否はNICUの病床の有無が最大のカギとなっており, すべてわれわれの施設の産科で引き受けられず問題となっている。

さて, 早産の危険のある母体搬送例については, 特別な場合を除き, 母体搬送後出生までの期間が長いほど望ましいと考えられている。事実, 搬送後24時間以内に出生する例は予後不良例が多い。しかしながら, 今回のわれわれの成績では搬送後24時間以内に出生した例も28週未満の3例(476g~796g)も含め9例全例救命できた。せっぱ詰まってる搬送はできるだけ避けるべきではあるものの, 産科診療所で生まれてしまったからの入院依頼・搬送よりもまだましであることを示すものとも考えられる。

なお, 母体搬送で死亡例はすべて搬送後24時間を経たからの死亡であったが, 23週のpreviable infantや先天異常など, いずれも現在の医療技術では救命不能の例であった。従って, 母体搬送例の予後は在胎週など成熟度の要因にもよるが, 搬送後の期間よりも児の合併疾患の重症度の方がより大きく関与しているものと思われ, この面からの更なる解析が必要であろう。

文 献

- 1)小川雄之亮: NICUの現状と問題点: 産婦治療, 59: 318, 1989.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1989年1年間にNICUに入院した母体搬送例について検討した。総入院数148例中院内出生例は70例(48.6%)で、このうち37例(53%)が母体搬送例であった。これら37例の内搬送後24時間以内に出生となったものは超未熟児3例を含む9例で、いずれの例も救命出来た。一方、母体搬送後24時間以上を経てから出生した28例の内4例(14.3%)が死亡した。これら4例は23週0日,516gの超未熟児,24週2日,622gのヘルペス感染の超未熟児,38週5日,2,960gのOTC完全欠損症,38週1日,1,984gの多発奇形を伴う18トリソミーであり、今回の調査においては、児の予後は母体搬送後出生までの時間よりも、児の合併疾患の有無に大きく左右されることが示されたと共に、母体搬送後短時間で分娩に至らざるを得ない例に対するケアの向上が示唆された。